

『昔の夢は今も夢』

レーゼ・ドラマ（読む戯曲）の魅力

天瀬裕康著

昨年の文藝特集号に掲載された先生の「壊滅の譜」は桜隊になつた旧苦楽座を題材にした大変興味あるものだつたが、実は私はその頃、地元の同人誌に昭和十八年に旗揚げしたばかりの苦楽座の丸山定夫、圓井恵子共演の「無法松の一生」を観ており、その一人が原爆で死んで十六年経つた今、彼等の舞台を観ている人は尠くなつたから彼等を観劇した事は私の宝だと思つてゐるなんて書いた処だつたので、それを先生に送つたのが縁で頼まれたのかなあと思つてゐる。

先生の今回の戯曲集「昔の夢は今も夢」はセンスのいい簡素に仕上げられた装丁が気持ち良く、七つの小篇がつましく掲載されている。多才な先生が演劇や戯

曲に造詣の深い事は聞いていたが、「医家芸術」のみのお付き合いの私は、殆どの作品は今回初めて読ませて頂いた訳である。七つの作品をそれぞれテーマ、モチーフによって分けて纏められたのは先生の多才ぶりで、テレビドラマ一編は別としてひとりずつ、ラジオドラマ、対話劇

評 吉村 外茂一

短編小説を読む気分

貴重な記録・桜隊の最期



云々」もそれなりの話題になつたが、余り問題にはならなかつたと

思つてゐる。

戯曲「軍縮の人」について私は述べさせて貰つて、この作品の如くスケールが大きい大作居はあるのに場面転換やテンポが早過ぎる感じがして惜しいし、勿体無い気がする。折角の豪華な材料だからテーマを絞つてじつくり取り組んで是非大作にして欲しい。

「医家芸術」に発表されたテレビドラマの「妹のいる部屋」は題材が認知症問題で大事件ではないが医者にとつては興

違いは結構壁が厚く、到底書き遂げれず、矢張り違和感を強くした。あとがきにも書かれているように天瀬先生は多才な勉強家だから私など云々する事ではないが、私は戯曲を書く時、舞台上での「序破急」をどう展開させ、どう始末つけるかを意識しながら書いているが、劇作を志す仲間内で「レーゼシナリオ

違いは結構壁が厚く、到底書き遂げれず、矢張り違和感を強くした。あとがきにも書かれているように天瀬先生は多才な勉強家だから私など云々する事ではないが、私は戯曲を書く時、舞台上での「序破急」をどう展開させ、どう始末つけるかを意識しながら書いているが、劇作を志す仲間内で「レーゼシナリオ

味のある材料で、これを戯曲ではなくテレビドラマで纏めたのは適切で成功したと思つたのである。

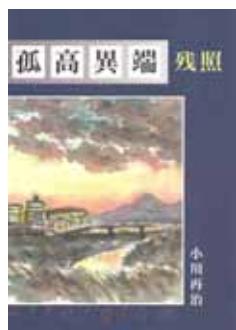
やつ一つのテレビドラマ「壊滅の譜」は私にとって印象的な作品である。実は「新劇の団十郎」とも呼ばれた丸山定夫と、園井恵子にはもう一つの思い出がある。若衆座も戦争中商業ベースの公演が困難になり、移動演劇隊を編成して稽古場を盛岡近郊に決めて演出の八田元夫、丸山と園井や仲みどり、永田靖等は弘島に行く前の一ヶ月程を磐梯温泉に来ていたのである。園井が右手盲出身でその縁だと聞いたが、紹介して貰れる人も居たら彼等と近づけるチャンスはもつとあつたのである。

そういう意味からも「壊滅の譜」は、冒頭に書いたように、私にはシナリオ作品として記録的資料、コーチス映画を観るよつた気持ちで読ませて頂いた。ぜひ一読をお奨めする。

(近代文藝社 定価・本体1,800円)

ほん

小川弔治著『孤高異端 残照』



微笑ましい人間観察

ところ、「あと10年は大丈夫」の医師の予言の1倍も生きて、八十路を何年か過ぎ、研究生活から離れて今は和英の読書やクラシック音楽にひたり隨筆を書く生活を楽しんでおられる。平家物語の「盛者必滅」を心に、やがて来る死を前に「なりゆきにまかせて氣楽」と開き直って、残照の世界を生きて行きたいと言つて、掲載されているエッセイから印象に残つた一文を紹介しよう。

先に『孤高異端』を出された著者は、先づ瑞玉中綴賞を受けられた。長年にわたる障害児・者教育に携われた功績を評価されたもの。

「妬みは人間の業」 世界的な学者たちの間でも、功名心や他者の業績に対するジエラシーがあり、それを心理学者らしく冷静に描いている。

「超適応重役」 心理学上では適応能力良好者であつても、時流に合わせて変わらぬ身の鮮やかさに辟易する話。

「辰巳栄一中将との奇縁」 日米開戦直前、旧制高校生のとき駐英武官の大胆な講演「英國と戦つた」を聞き感銘を受けた。戦後に存命を知つて訪問、「子息と二代続いての文際を記された」()

御園生園写真集 1971~2010
40年の軌跡快速「エアポート114号」(3890M)
(背景に石狩湾新港を望む) 銀函~朝里

呼人のミズバショウ大群落を行く特急「オホーツク3号」 網走~呼人間

著者は、これまでにも随想集「かたくりの花」と「延齡草」を世に送っている。今回、学童のころから親しんできたカメラで、成育の地である北海道を舞台にした鉄道を主体に写真集を出した。

鉄道マー「ふりは」時折、本誌の随想欄でお目にかかる。ただ一般のマー「ア」と違つところは、名物、列車の引退や營業開始の一番列車などに

旅情を誘つファンタジー

カメラを首に線路内にも立ち入る傍若無人な振る舞いの人々とは違つて、被写体の汽車や電車への愛情が満ちている。車窓から眺める風景も素晴らしい。何のシーンに思わず引き込まれる。たとえば宗谷本線の急行宗谷4号を手前に雄大な大雪山系を望む風景、道内随一の長さを誇る石狩川橋梁(札沼線)、石狩湾と並行に走る函館本線・朝里~小樽築港間、さりに日本初の心臓移植の舞台の一つでもあった塙谷~蘭島のどこまでも青い日本海、網走近くのミズバショウの大群落(石北本線)、大沼の駒ヶ岳の雄姿、狩勝峠や礼文華峠などなど。

第一の故郷と著者が言ひ浦河の町、札幌の市内電車……いづれも親しい友人を撮影するかのよつた日だ。そしてタブレットの交換にみられるように鉄道員の息遣いも感じられる。

むかし、万世橋の鉄道博物館しか知らない私には、羨望の一冊だった。()